

新体詩抄序

唐の横町の毛唐人が云ふに「大凡物不得其平則鳴、艸木之無聲、風撓之鳴、水之無聲、風蕩之鳴、」云云、「人之於言也亦然、不得已而後言、其歌也有思、其哭也有懷、凡出乎口而為聲者、其皆有弗平者乎」と我邦にも長歌だの三十一文字だの川柳だの支那流の詩だのと、様々の鳴方ありて、月を見てハ鳴り、雪を見てハ鳴り、花を見てハ鳴り、別品を見てハ鳴り、矢鱈に鳴りちらすとも、十分に鳴り尽すこと能はず、何んとなれば、古来長歌を以て鳴れるものなきにあらねども、こゝ最と稀なることにして、殊に近世に至りてハ、長歌ハ全く地を払へる有様に事物に感動せられたる時の鳴方ハ皆三十一文字や川柳や簡短なる唐詩と出掛け実到手軽なる鳴方なればなり、蓋し其鳴方の斯く簡短なるを以て見れば、其内にある思想とても又極めて簡短なるものたるハ疑なし、甚だ無礼なる申分ハ知らねども三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り尽すことの出来る思想ハ、線香烟花か流星位の思に過ぎるべし、少しく連続したる思想、内にありて、鳴らんとするとき、固より斯く簡短なる鳴方にて満足するものにあらず又唐風の詩を作り稍長／＼と鳴るもの、近来世間に尠しとせざれども抑も詩と云ふものハ其意味も固より大切なれども、其音調の良否も、又甚だ大切なり、夫れ變則者流の漢学者の唐詩を作るや、固より平仄てふものありて其詩たる一通りハ、音律に叶ひたることハ、万々疑なしと雖も、芥子坊主をして、之を呼鳴らしめたらんにハ果して心地よき音調のものなるか、將た破鍋を雷木にて叩くが如きものなるか、未だ知るべからず、蓋し日本人に取りてハ支那流の詩ハ、恰も瘧の手真似、若しくハ操人形の手踊の如きものなり、瘧に生れずして、瘧の真似をなし、人と生れて、人形の真似をするもの、又憫まざるべけんや、そこで我等ハ連続したる思想、

内にある訳にもあらず心地よき音調を以て能く鳴ることの出来るものにもあらねども、全く三十一文字や堅くるしき唐詩の出来ざる悔しさに、何か一つと腕組したれど、やはり古来の長歌流新体など、名を付けるに付けたが、矢張自分免許の鼻高で、あたらし詩を惜げなく、訳も分らぬ文句を以て、訳したもので、尚ほ拙な、をのが、ものせる長文句、能く見れば、

新体と名こそ新に聞ゆれど、

やはり古体の大仏の法螺、

法螺と知りつゝ古を、我よりなさん下心、笑止とこそハ云ふべけれ、法螺ハ我より始まれる、ものにあらぬハまだしもぞ人のなさざることにてハ、仮令ハ法螺でもなきぞかし、唯々人に異なるは人の鳴らんとする時ハ、しやれた雅言や唐国の、四角四面の字を以て、詩文の才を表ハすも、我等が組に至りてハ、新古雅俗の区別なく、和漢西洋ごちやませで、人に分かるが專一と、人に分かると自分極め、易く書くのが一の能見識高き人たちが、可咲しなものと笑ハ、笑ハ、諺に云ふ、蓼食ふ虫も好き／＼なれば、多くの人の其中にハ、自分極の我等の美拳を賛成する馬鹿なしとせず、安んぞ知らん我等のちんぷんかんの寝言とても遂にハ今日の唐詩の如く人にもてはやさるゝことなきを、穴賢、

明治十五年五月

、山仙士外山正一識

山宮允 『日本現代詩大系』第一巻解説より
『新體詩抄』の編者たちの主張は、ワーズワースの英詩革新の主張乃至その発展と見られる近代自由詩の主張に他ならない。即ち彼等は、ワーズワースや自由詩の作家たちと同じく、平俗常用の言語を用い、取材の範囲を拡大し、在来の形式的制約を免れて、自由清新なる国詩を創成しようとしたのである。

『新体詩』の不評は上述の如く、ただ「見慣れぬ体裁」のためばかりではなく、その本質的欠陥に出るのであった。即ち『詩抄』所収の訳詩、創作詩に於ける用語選択の杜撰、原作の理解の不徹底は暫く措くも、比較的好評であった尚今（谷田部）のグレーの訳すら、清風の指摘した如く、措辞の拙劣が否定し難き欠陥であった。山（外山）の「社会学の原理に題す」に到つては、取材範囲拡大の主張を實踐して見たと云うだけで、まったく詩の称呼に値しない。ただこの叙述に止り、用語や措辞の上にも加藤熙の「騎歌尽」や福沢諭吉の「世界国尽」の如き類似の作物に及ばざること遠く、時に調子づいて「インガレ風、阿呆陀羅經式に逸脱して噴飯を禁ぜざらしめる底の卑俗滑稽な作物で、やがて風刺作家斎藤藤雨の嗤笑する所となつたのも無理からぬ次第であった。（傍線引用者）」

谷川雁 『現代詩における近代主義と農民』(「原点が存在する」)

現代詩の眞の祖先は外山某とかいうビスマルク風の先生ではない。あえていえば、世直し一揆の最高形態、武装農民軍、長州奇兵隊の軍歌「宮さん宮さん」というべきであろう。売られた娘たちの蹶起を歌う「しのめのストライキ」であろう。

松永伍一 『日本農民詩史』第一編 第二章

近代日本の農民詩は、これら土着農民(引用者注:この前で佐倉惣五郎を取り上げた口説などを引用している)の闘争を基点として創造さるべきであったにもかかわらず、表現能力をみずから育てることのできなかつた農民は、ついに明治初期の「新体詩」を否認することのないまま文字から閉鎖された立場をやむなく守りつづけたのである。農民詩の生誕が、せめて維新时期ないしは地租改正の時期に見られたとすれば、文人墨客的な風流とヨーロッパ的傾向の合流して成つた新体詩のムード主義は、その非生産的・趣味的な弱さによって自己解体を余儀なくされたはずであった。

ウラジミール・ポップ 『魔法昔話の研究』(「口承文芸の特徴 歴史的にアプローチするなら、階級発生以前の民族にとつて口承文芸とはその民族全体の創作物というべきである。未開民族のあらゆる詩的創作物はそのまま口承文芸であり、口承文芸学の対象である。階級の発展段階に達した民族については、我々が口承文芸と呼ぶのは支配者階級を除く全階級の創作物であり、支配者階級の創作物は文学にはいる。口承文芸に含まれるのはまずは農民や労働者などの被抑圧階級の創作物であり、社会の下層部に近い中間層の創作物である。)

詩的創作物は實際上、ほぼ必ず音楽と結びついている。

平家

1 その子どもは皆諸衛佐になる昇殿せしに殿上の交はりを入嫌ふに及ばず、ある時忠盛備前の国よりはるばると、都へ上られたりけるを、鳥羽院御前へ召して、さて明石浦はいかにと、「下」仰せければ、忠盛かしこまつて

2 有明の、月も明石の、浦風に、浪ばかりこそ、寄ると見えしかと

3 判官 後藤兵衛実基を召して あれはいかにと宣へば 射よとにこそ候ふめれ ただし大將軍矢面に進んで 傾城をこゝ覧せられんところを 手垂れにねらうて射落とせとの 謀とこそ存じ候へ さりながら扇をば 射させらるべうもや候ふらんと申しければ 判官味方に射つべき仁は誰かあると宣へば、上手ども多う候ふなかに下野の国の住人 那須太郎資高が子に与一宗高とて 小兵にては候へども 手は利いて候ふと 申す

歌舞伎

外郎売

ヒヨツと舌が廻り出すと矢も盾も堪りませぬ。そりやそりやそりや、廻つて来た、廻つて来た。そもそも早口のはじまりは、あかさたな、はまやらわ、おこその、ほもよろをとと一寸先の御小仏に御蹴躰きやるな、細溝にどじよにより。京の生鱈、奈良生真名鯉、ちよいと四五貫目。来るわ来るわ何が来る、高野のお山の御柿小僧、狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。武器、馬具、武器馬具、三武器馬具、合わせて武器馬具、六武器馬具。菊、栗、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗、六菊栗。あの長押の長薙刀は誰が長薙刀ぞ。向こうの胡麻殻は荏の胡麻殻か真胡麻殻か、あれぞ本当の真胡麻殻。がらびいがらびい風車。起きやがれ子法師、起きやがれ小法師、昨夜も溢してまた溢した。

たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりからちりから、つたつたぼ、たつたぼ、たつたぼ。落ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬ物は、五徳・鉄灸、金熊童子に、石熊・石持・虎熊・虎鱸。中にも東寺の羅生門では、茨木童子が腕栗五合掴んでおむしやるがのう、頼光の膝元去らず。鮎。金柑・椎茸・定めて蕎麦切り・素麺・鰻鮓か愚鈍な小新発知。小棚の小下の小桶に小味噌が小有るぞ、小杓子小持つて小掬つて小寄せ。おつと合点だ、心得田圃の川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走つて行けば、灸を擦り剥く二里ばかりか、藤沢・平塚・大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原、透頂香。隠れ御座らぬ貴賤群衆の、花の御江戸の花うしろ。アレあの花を見て、御心を御和らぎやと言う、産子・這子に玉子まで、此の外郎の御評判、御存じ無いとは申されまい。まいまいつぶりまいつぶり、角出せ棒出せぼうぼう眉に、臼杵挿鉢ばちばち桑原桑原と、羽目を外して今日御出での何茂様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せき引つ張り、東方世界の薬の元締、薬師如来も照覧あれと、ホホ敬つて申す。

白浪五人男

問われて名乗るもおこがましいが、生れは遠州浜松在、十四のときから親に離れ、身のなりわいも白波の、沖を越えたる夜働き、盗みはすれど非道はせず、人に情けを掛川から、金谷をかけて宿々に、義賊と噂高札に、廻る配符の盪越し、危ねえその身の境涯も、最早や四十に人間の、定めは僅か五十年、六十余州に隠れのねえ、賊徒の張本、日本駄右衛門

さてその次は江の島の、岩本院の稚児上り、普段着慣れし振袖から、鬚も島田に由比ヶ浜、打ち込む波にしっぽりと、女に化けて美人局、油断のならぬ小娘も、小袋坂に身の破れ、悪い浮名も竜の口、土の牢へも二度三度、だん／＼越ゆる鳥居数、八幡様の氏子にて、鎌倉無宿と肩書も、島に育つてその名せえ、

弁天小僧菊之助

三人吉三

月も朧に白魚の篝も霞む春の空冷てえ風もほろ酔いに心持ちよくうかうかと浮かれ鳥のただ一羽ねぐらへ帰える川端で竿の雫が濡れ手で泡思いがけなく手に入る百両ほんに今宵は節分か 西の海より川の中落ちた夜鷹は厄落とし 豆沢山に一文の銭と違つて金包みこいつあ春から縁起が良いわい

文楽

傾城恋飛脚

(地)涙の隙(ひま)に巾着より。金一包み取出し、(詞)これは京の御本寺様へ。上げうと思うた金なれど、嫁と思うてやるではない。コリヤ只今のお札の為、是を路銀にちつとなど。遠い所へ往て下されと。(地)渡せば梅川押戴き。(詞)お心附いた此お金。逆様ながら戴きます。(地)大坂を立退いても。私が姿目に立てば。借駕籠に日を送り。奈良の…

瞽女唄

さればよりては これにまた いずれに愚かはなければも 何新作のなきままに 古き文句に候えど もの哀れを尋ぬれば 芦屋道満白狐 変化に葛の葉子別れを あらあら読み上げ奉る ただ情けなや葛の葉は 夫に別れ子に別れ もとの信太へ帰らんと 心のうちでは思えども いや待てしばし我が心 今生の…

参考文献

『日本現代詩大系第一巻』(河出書房新社、1974年)(元は河出書房、1950年)、p.459(山宮允解説)

谷川雁『原点が存在する』(現代思潮社、1970年)(元は弘文堂、1958年)pp.101-102

松永伍一『日本農民詩史上巻』(法政大学出版会、1967年)、pp.12-13

ウラジール・プロップ『魔法昔話の研究』(齋藤君子訳、講談社学術文庫、2009年)、p.247,248

関山和夫『説教の歴史』

兵藤裕司『琵琶法師』(岩波新書、2009年)

小沢昭一『日本の放浪芸』(岩波現代文庫、2006年)

『折口信夫全集』(中公文庫、特に7、17巻)

三隅治雄『さすらい人の芸能史』(NHKブックス219、1974年)

『阿賀北瞽女と瞽女唄集』(新発田市文化財調査審議会、1975年)

CD

琵琶法師の世界 平家物語 今井勉 EBISU 13-19

肥後の琵琶弾き 山鹿良之の世界／語りと神事／日本伝統文化振興財団(ビクター) VZCG-8377～9

ドキュメント日本の放浪芸 小沢昭一 ビクター VICG-60231～37

ドキュメントまた又日本の放浪芸 小沢昭一 ビクター VICG-60243～48

小沢昭一が訪ねた能登の節談説教 ビクター VICG60500

江戸の文化 語り コムリア COCG32071

最後の瞽女 小林ハル 96歳の絶唱 瞽女文化を顕彰する会 KHK-96

説経節 初代若松若太夫 説教若松編集室 ENCD-105